

【学会報告】

The 21st International Conference of the Korean Society for Gerontology:
Intervention of Aging and Age-related Diseasesに参加して

丸山 直記

東京都健康長寿医療センター研究所

7月中旬に韓国老化学会が主催する第21回国際シンポジウムに参加するために釜山を訪問しました。多くの韓国の友人との再会と欧米からの参加者との出会いを楽しみました。私は最初の日本人発表者として東北大地震に対する温かいメッセージと支援に対する謝辞を述べました。東京に於ける放射能問題については研究者なので皆さん冷静な判断をしていました。多くの講演の中から、私の友人であり当研究所に何度も来ているソウル大学のSang Chul Park先生の講演についてご紹介したいと思います。彼は韓国のハンセン病患者が収容されていた島で高齢者の健康調査を行いました。日本ではもう新患者が発症していませんが、韓国も同様に新しい発症例は無く、施設が外に対して閉ざされてはなりません。しかし社会的差別を恐れて多くの高齢の元患者が暮らしています。Park先生はこの島に住んでいる高齢者が概して健康であることに興味を持たれて住民の健康調査を行ったのです。その結果、この島の住民は他の地域に居住する高齢者より健康状態が良いことを確認しました。

Park先生はその理由を様々な観点から解析しました。長い間、社会的に差別されてきたことから地域の結びつきが強いことも特徴的でしたが、調査の中で老化の生化学者であるPark先生が最も興味を持ったことは、ハンセン病の治療薬の働きでした。その薬はDDS (4,4'-diaminophenylsulfone) という一種の抗生物質です。実

は多くの元患者は、もはや必要は無いのですが、再発を恐れて治癒後も服薬を続けていました。Park先生は線虫を用いてDDSの働きを詳細に解析しました。そしてDDSは顕著に体内の活性酸素を低下させることを見つけました。その結果、線虫の動きが活発になり寿命を延長させるという結論を得ました。分子生物学的には細胞内におけるDDSが作用する体内の分子はpyruvate kinase-1 (pyg-1) 酵素であり、DDSがこの酵素の働きを高めた結果、特に筋肉への良い効果があり寿命の延長につながっているという結論です。Park先生はこの研究を進めて、より良い健康長寿のための研究を行いたいとのことでした。Park先生の研究経過は我々の活動に重要な示唆を与えてくれます。現在、私達の職場でも領域を超えた研究の連携が奨励されています。地域においてなされた様々な健康調査から得られた研究を、基礎老化学研究者が異なった角度から見ることにより新しい展開が開かれる可能性があります。シンポジウムでは私が尊敬する名誉会員のByung Pal Yu先生は領域を超えた幅広い研究に大きな期待を寄せていることを講演してくれました。

追記：韓国における国立の老化研究所の設立は政治状況の変化に振り回されているようで、なかなか決着がつかないとのことでした。またSang Chul Park先生はGachon University (Inchon) に移られました。

